

アジア人の化粧に見られる身体観・身体表象とその変容についての研究 —身体装飾のアジア的伝統と〈化粧のグローバル化〉の狭間で—

東北大学大学院国際文化研究科

山下 博司

Asia, or more specifically so-called "Monsoon-Asia" in celebrated Tetsuro Watsuji's terminology, is undergoing rapid globalization in various aspects of human life including fashion and cosmetics. However, Asia still retains the cosmetological tradition deep-rooted in its history and culture with the span of thousands of years. In this study, we take up the indigenous way of cosmetology and its cultural significance as well as the dynamics of transformation in the present era of extensive globalization.

In the present paper, the focus will be placed on the role of eyes and their accentuation employing native cosmetological techniques. We will point out the magical significance of those traditions widely observed in Asia, from the viewpoint of ritualism and native religious institutions.

Finally, we will sum up the discussion and properly locate it in the broad context of anticipated cosmetological research project with encompassing perspectives.

1. 緒言

本研究課題は化粧の文化論、あるいは身体装飾の思想研究を指向するもので、文明史や文化史の研究においてきわめて斬新な研究分野を構成する。日本を包含するアジア地域を中心的な考察の対象とするが、アジアの諸文明における化粧の文化史的・精神史的意義の究明を基礎にして、その方法論と成果をアフリカやヨーロッパといった旧大陸の文明、さらにはアメリカやオーストラリアなど新大陸の文明にも及ぼし、体系的な「化粧の文化学」を構築することを企図している。

「コスメトロジー」が、即物的な意味内容としての狭義の「美容術」ではなく、化粧に関する総合的・体系的な学問をさす用語と捉えた場合、理系・文系といった既成の学問領域の枠組を超えた広がりや奥行きをもって然るべきである。素材や物性についての研究、生体作用や安全性についての研究と並んで、化粧を施す主体の側の文化的・社会的な研究も相俟って、体系的でホーリスティック（全体論的）なコスメトロジーが成立するものと考えられる。

本研究は、アジア地域の「化粧における歴史的交流」の足跡をたどり、その背後にある思想や精神をていねいに読みとる作業を通じて、きわめて日常的な「化粧」という行為に潜む文化的・社会的意味を追究するコスメトロジー研究の一環として位置づけられる。

アジアの化粧の背景に潜む思想や文化伝統を理解するこ



The Cosmetological Tradition in Asia
and its Transformation under the Age
of Globalization

Hiroshi Yamashita
Tohoku University

とは、脱宗教化した現代の化粧のあり方やトレンドに対して多くの刺激や示唆を与えることになるであろう。

2. 考察

2.1 「アジア」の概念と領域

本稿は、如上の立脚点に立ち、アジア地域における伝統的身体装飾、とくに「化粧」という人間生活の日常的な行為について、その特徴と意味とを比較文化論のおよび文化史学的視座から示唆しようとするものである。この場合の「アジア」とは、日本を含む東アジア、東南アジア、および南アジアを第一義的に指すものとする。

これらの地域を一括りに論じるのは、まず気候風土的に近似する条件下にあるという事実に基づく。この地域を和辻哲郎の『風土』の所論に倣い「モンスーン・アジア」とも規定し得る所以である。さらに、仏教やヒンドゥー教、儒教や道教など、この地域内に起源を有する共通の宗教的影響が浸潤していることも、同地域を一括して論じる根拠となる。言語的にはきわめて多様かつ多元的な様相を呈するものの、自然的・文化的・歴史的に緩やかな紐帯で結ばれてきた地域と認め得るのである。（さりとて、このことを以て地域内の多様性をことさら無視しようとするものではない。大局的な議論をまず踏まえたのちに、細部にも及ぼすという順序をとりたい。）

現代社会においては、情報の越境や広範なグローバリゼーションによって、世界的規模で美意識や美的観念に均質化・平準化の現象が進行していることは否定できない。無論アジアとてこの大きな流れの中で例外たり得ない。アジア地域においても、化粧法を含む固有の伝統的身体装飾の方法が今もって盤石であるとは言い難い現状にある。本稿では、グローバル化に起因する支配的トレンドを現実として踏まえつつも、なおも生きるアジア特有の傾向に光をあてることで、アジア人に特徴的な身体観や宇宙観に迫りた

いと考える。

2.2 「目の強調」が示唆するもの

アジアの化粧法の特徴をなすものの代表例として、頬紅を塗ったり、いわゆるアイライナーに相当するものを使った「目の強調」を指摘することができる。(ちなみに、アイライナー (eyeliner) は純然たる英語の単語であるが、アイライン (eyeline) のほうは和製英語である。) しかも、これは西アジアも含めた広義のアジア地域に共通する要素でもある。現代のアジア女性の間では、チーク、ファンデーション、ブルーのアイシャドウなどが一般化しているが、これらは西洋の化粧法の影響で近年になって定着したものと考えるのが妥当である。本来は地域自生の植物成分や鉱物からの天然染料を効果的に用いて、目、唇、爪などを赤その他に染色・着色していたのである。

「目の強調」は、アジア人の化粧にとって半ば本質的な意味をもっている。かなりの程度画一化された「目の強調」の技法(化粧術)によって、結果的に類似する印象を備えた顔貌を得ることになるが、そのことは化粧の目的や効果を減じたり損なったりするものではない。アジアの化粧は西洋のそれのような「個性」を標榜しない。化粧の「仕様」が同じか統一されており、化粧の結果として個性的な美しさが引き立つというより、むしろ類似した顔つきになるのである。一方現代の日本に目を転じれば、わざとらしさを排除してその人の美しさを際立たせるようなメイクが理想とされている。技術力があってのものだが、個人の肌の色や顔かたちによってその人の個性が美しく際立つような化粧が求められるのである。西洋の場合もほぼ同様と言ってよい。というより、日本をはじめとする現代社会の化粧に関わる観念が西洋の影響を濃厚に被っているのである。

ところがアジア古来の伝統に発する化粧には、「個性の発現」は必ずしも期待されない。様式化・規範化が顕著なのである。あたかも、理想とする、あるいは規範となる固定的な顔貌の心象があって、それに似せるために敢えて化粧を施しているようにすら見える。理想とする相好の概念が共有されている、と言い換えてもよい。

2.3 化粧の宗教性

それでは「固定的な顔貌の心象」とは一体いかなるものなのか、具体例を掲げて論じよう。アジア、とりわけヒンドゥー化した南アジアや東南アジアで、女性の化粧の祖型としてあるのは超自然的存在、より具体的には「女神」のイメージである。すなわち、化粧を施すことで女神と見まがう姿、あるいは少なくとも女神に似た姿になるのである。インド女性は、女神のイメージに似せた化粧によって、個性がない同じ顔になる。そこには女神が女性の美しさの理想あるいは典型になっているという事情が伏在する一方、

女神に関わる呪術性・宗教性も影を落としている。

いわば女神に自らを似せることによって自身が女神と一如となり、合体した女神のもつパワーを己のものとして神の加護を得るのである。化粧によって変身し、成り代わった他者(ここでは超自然的存在)の呪力を得るという発想である。身体装飾によって「神的なるもの」と同一化を果たすというプロセスにおいて、化粧は仮面とも軌を一にしている。さらには、超自然的存在や神秘的な印を彫った入れ墨(タトゥー)とも、その発想を同じくしている。卑近な例を挙げれば、プロレスラーがマスクをつけてリングに上がるのも、そのマスクにデザインされた存在(猛獣や悪魔など)の威力を得るがためである。これらの現象の背後にあるのは、アニミズム、シャーマニズム、トーテミズムなどの原初的かつ通文化的な宗教観念である。

この文脈で、化粧と神聖舞踊との結びつきも指摘され得る。世界各国の舞踊に詳しい芸能人類学者の宮尾慈良によれば、南アジア・東南アジアでは、バラタナーティヤムにせよバリの踊りにせよ、踊り子は化粧を施す前に神に祈りを捧げるといふ。このことは、神聖舞踊が神への奉納という意味をもつことを表しているが、同時に、化粧のプロセスを経ながら踊り手が踊られる神へと変身していく、一体化を遂げていくことも示唆している。「神の器」となった踊り子は、あたかも神が憑依してでもいるかのように、あるいは神そのものように踊るのである。日本の巫女がやはり踊りを踊ることも想起される。アジアにおいて化粧が単なる世俗的な行為ではないことの証である。

化粧により変身するがゆえにナチュラルメイクは必要としない。その場合の化粧に要求されるのは、むしろ個性の滅却であり、規範性の優越である。「個性」はアジアの化粧にとって本質的な意味をもたない。一切を統べる、「個」を超越した存在になる以上、個性は問題にならないからである。化粧は人間が神あるいは神秘的存在になるための操作であり、その意味でまさしく「化ける」のである。そこにあるのは「没個性化」であって、ナチュラルメイク云々の余地は存在しない。

「没個性」を指向する化粧の伝統は、神が憑依したり、聖なるものと一体になったり、最高実在と一つになるという、西洋や西アジアにおける神と人との関係からは導き得ないアジアに独特な宗教観念の為せる技といえることができる。

2.4 化粧の呪術性

化粧には如上のような宗教性に加え、呪術性も指摘されなければならない。キリスト教徒やイスラーム教徒などは別として、インド女性の化粧は眉間にクンクマという赤い斑点を施すことで完成する。吉祥なる印とされるが、男性もこの斑点を付けることが見られる。特に朝の沐浴のあと、

身支度を調べてから、神に祈ってクンクマを付けるのである。クンクマの起源について定説はないが、犠牲獣の血に由来するとする見かたが有力である。犠牲になった獣の呪力、あるいは犠牲を伴う宗教儀礼を経て更新された神のパワーを我がものとするのである。ここにあるのも化粧の宗教性・呪術性である。このクンクマに似た習俗は、ヒンドゥー化したアジア（インドやバリなど）のほか、古代の日本（現代を含む）韓国やタイなどにも観察される。おそらくインドからの影響が及んだものと考えられ、本来はそのような宗教的観念を伴って採り入れられたものであろう。

「目の強調」という点からすれば、クンクマは「第三の目」でもある。シヴァ神が第三の目から発するパワーによって邪悪な存在を焼き尽くすように、人間に与えられた第三の目としてのクンクマは、邪気を祓い、吉祥をもたらすのである。

このような発想は、化粧とはある意味で矛盾する行為—身体を取って汚すこと—をも説明する。インドでは赤子の頬に煤を使って大きな斑点をつける。見目麗しい赤ん坊は悪魔の関心を引き、命を奪われる。悪魔の気を引かないよう、敢えて頬に煤を塗って醜くするのである。古代日本においても、子供に敢えて汚いイメージをもつ名前をつけ、鬼を遠ざけたというが、やはり魔除けの発想に基づく。このような、「化粧」とは真っ向から対立するように見える〈顔を汚す〉という行為が、「呪術性」という意味で化粧と軌を一にしているのである。

以上のことから、アジアにおける化粧ないし身体装飾の顕示的性格は明らかである。変身しなくてははいけない以上、あるいはわかってもらわなくてははいけない以上、化粧した事実が目立たなくてはならないのである。化粧を施した事実が隠匿される「ナチュラルメイク」ではなく、作為性や虚構性（虚偽性と言い換え得るかもしれない）が明らかであって構わないし、むしろ明らかである必要があるのである。アジア人にとって化粧による虚構性が露わになること、顕示的であることに抵抗を覚えない背景には、以上のようなアジアの化粧の根本にある観念が作用していると考えられることができる。

2.5 「目」のもつ神秘力

「目の強調」の話題に戻ろう。上述の文脈から考えた場合、目のもつ呪術性の問題に突き当たる。目は感官であるにとどまらず、神秘的なパワーに裏打ちされた器官でもある。しかも両義的な性格 (ambivalence) を具えている。その視線は、人を加護する力を有する一方で、人に不幸を招来することもできる。後者の場合が邪視 (evil eye) である。多くの視線にさらされた時には、邪視を祓う儀礼が施される。筆者も、南インドの部族社会で祭りに参加した際、入念にこの邪視の祓いを受けた記憶がある。

このように目には不可思議な力が宿っているとされ、未だに人々の信じるところとなっている。南インドでは赤ん坊の両眼にマイと呼ばれる黒い縁取りを施し、目を際立たせるが、そこにも呪術的な観念が働いていることは想像に難くない。

目に関わる諸問題は、アジア人の化粧が宗教性と顕著な結びつきを示す一例として提示したに過ぎない。このような例は枚挙にいとまがない。

3. 総括

3.1 結びと展望

アジア人の「化粧」は単なる化粧ではない。そこには、美的観念だけでなく、人々の日常の営為の背後にある伝統的な神観念、身体観、世界観が色濃く反映されている。

アジアの化粧の伝統について、本報告では諸々の理由により一つのものとして扱ったが、均質性が貫徹しているわけではなく、細部に目を凝らせば歴史文化的に大きく二つの系統に分かれると言ってよい。一つは南アジア（インド文化圏）であり、一つは東アジア（中国文化圏）である。今後は、東南アジアへの伝播など、民族の違いを超えて広範な影響を与えた南アジア系の化粧の伝統を手始めに、そこに垣間見られるアジア的精神世界を、さまざまな方面（哲学思想、生命観、身体観、芸術理論など）からあぶり出し、その意義を多面的に究明していきたいと考えている。

考察の具体的対象としては、南アジアの伝統的芸術理論（ラサ論、美学理論、ナーティヤ・シャーストラなど）、芸能パフォーマンス（カタカリ、バラタナーティヤム、オリッスィー、カタックなど）、伝統医療と栄養学（アーユルヴェーダ、スイッダマルツヴァムなど）、インド古典哲学理論（シャッターダルシャナや仏教・ジャイナ教など）、東南アジア（インドシナ、マレー半島、インドネシア）への伝播の様相などが考えられよう。

これらの個別的考察から、南アジアの生活文化を特徴づける基本色調（白・黒・黄・赤・青）の由来を探り、南アジアの化粧とその色調の背後にある世界観や身体観を明らかにしたい。

南アジアの化粧の伝統は、伝統的ファッションとともに移民等を通じて世界各地に拡散している。個々のディアスポラにとどまらず、イギリスなどホスト社会の服飾文化にも影響を与えつつある。

3.2 おわりに

「化粧」についての通文化的な研究は、これまでほとんど為されてこなかった。個々の国民ないし民族集団についての個別的な研究成果は散見されるものの、通文化的な視点を採り入れつつそれらを総合し、精神文化との関わりをも考慮しながら体系的に整えられた研究は事実上皆無に

等しい。その重要性和研究の潜在的可能性にもかかわらず、文化研究の中で等閑視され続けてきたのが現状である。

かたや、本報告で特に取り上げなかったが、当該課題の中心的なテーマとも関連する「色彩」ないし「彩色」についても、事情は概ね同様である。イエール大学出版部など欧米の著名な大学出版局からアジア文化における「色」を扱った写真集が刊行されてはいるが、大学からの出版物であるにもかかわらず、適切な学問的解説や客観的分析を欠いており、折角の美しいカラー写真を盛った出版物も存在意義が半減している。

こうした現象の背景にあるのは、物質文化や大衆文化に対する学問的関心および学問的理解の相対的稀薄さである。たとえ意識はしていないにせよ、人間の「おもて」に顕れ出た様相は、その人間の内面をも表出しているに然るべきであり、またそうであるに相違ない。哲学や思想を哲学書や思想書に拠って考察するのは至極当然のこととしても、化粧や服飾などの表現様式の中に内面世界の伝統を見出そうとするのも、劣らず正当な精神文化研究たり得るはずである。

本研究は、このような既成の学問的営為の限界を踏まえ、かつ虚心な反省にも立ちながら、化粧や服飾等の物質文化の形態の中にその地域・文化圏の精神の営みの反映を探る糸口を見出す試みであり、今後構築されるべき体系的研究の枢要な一部を構成するものである。

(参考文献)

- 1) 宮尾慈良『比較芸能論』彩流社、東京、2006.
- 2) 宮尾慈良『舞踊の民族誌』彩流社、東京、2007.
- 3) 山下博司「南アジア世界における〈衣〉の意味とその変容－経済開放下の変化をふまえて－」『第9期ファッション研究助成事業成果報告書』、日本ファッション協会、東京、2003.
- 4) 山下博司・橋本泰元・宮本久義『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版、東京、2005.
- 5) 山下博司『ヒンドゥー教－インドという〈謎〉－』講談社、東京、2004.
- 6) 山下博司『ヨーガの思想』講談社、東京、2009.
- 7) 山下博司「ニールギリの邑から－バダガ族の火渡りと輪舞の祭」『コッラニ』第13号、コッラニ編集部、東京、1988.
- 8) Yamashita, Hiroshi, "The Forms and Functions of the Aiyandar Temple Complex: A Preliminary Study on the Cult of the Male Godlings in Rural Tamil Nadu", Y.Ikari & Y.Nagano (eds.), *From Vedic Altar to Village Shrine: Towards an Interface between Indology and Anthropology* (Senri Ethnological Studies 36), National Museum of Ethnology, Osaka, 1993.